

# 偽神紀

## 其の二

紫のカラスは珍しいか？

ユダが訊いた。

そりゃ珍しいでしょう。

普通は黒いのばかりだから。

いや、ちっとも珍しくないよ、

紫のカラスはいないからね。

世の中って、そんなもんさ。



あーあ、ついにやつちまったよイエス君。いくらブチ切れてたとしても人殺しは罪になる……はずなんだけど、さて、どうなるでしょう。アタシも訳しててハラハラドキドキした。

最初に言っとく、イエスは死なない。それで、自分でも想像してなかった、ある宗教を始めちゃうことになるんだ。まさかねえ、二七神の子が宗教の開祖になるなんて、これだから世界はわかんない。

お話の内容は、これまでたくさん印刷されてる本と似てる。だけど、このテキストが一番理屈に通ってるし筋道も通ると思うんだ。もともと、これがホントかどうかは、今までとおんなじでアタシは知らないけどね。

そうそう、お話に出てくるお金の単位、二種類あるでしょ。タラントとドラクマ。ローマのお金がタラントで、一タラントは、そーだなー、今の百ドルくらいかな。んで、ドラクマはギリシャ系。一ドルってとこ。まだお札はなかったから、コインばっかで運ぶの大変だったろうな。

今回は神様とカナンの動物たちも出てくる。ちょっとだけどね。お話が古巣に戻りつつある、ってとこかしら。なお原典の線文字Bテキストはアメリカ領キューバ、グエンタナモのネコペディアで読めます。

んじゃ、陰謀と裏切り渦巻く後編、ごゆっく。

蔵小路タマ

## 荒野のイエス

「かあさん、僕は人を殺した」血刀を掲げ、白いトリーガに返り血を浴びたイエスが戸口に立っていた。

イブの顔から血の気が引いた。「お前、怪我は？」  
「僕は大丈夫だ。相手は死んだ」

「誰を殺ったんだ」訊きながらイブはイエスを室内に入れ、ドアに鍵をかけた。

「イザヤだよ。イザヤベンダサン」

イブの表情が見る見る明るくなった。「あの泥棒野郎のベンダサンだね？ お前、すごいじゃないか。チンピラでも殺したんなら叱り付けるところだけど、あの恥知らずの守銭奴を殺したのかい。ああ神様、イエスに祝福あれ。さあ、風呂場で血を流してきな。着替えは麻の服にしなさい」

風呂から出ると、簡単な食事が用意されていた。パンとワインと干し肉だ。

「全然食欲がない」

「なくても食いな。阿呆を一人殺ったくらいでビビるんじゃない。なんたってイザヤの野郎はいけ好か

なかったよ。うちの商売に乗っかって大儲けしたくせに、盆暮れの付け届けはないし、道で会ってもふんぞり返ってやがった。ほんとに殺したんだろうね。頭は潰したかい？」

「へびじゃないからなあ」

「生き返らないことを祈ろう。それに、もうひとつ褒めてやりたいことがあるんだ。カネのことだよ」

「父さんから盗んだの、わかった？」  
「ああ。たどえ女郎だろうが、惚れた女のために大金盗むなんて、お前も立派な男になったねえ。父さんなんか泣いて喜んでた。それでこそおれの息子だ、なんて言ってるさ」

「盗んでも怒ってないの？」

「最初は大荒れだったさ。でも、あたしが『あんたにそんな度胸があったかい？』って訊いたら、いきなり変わってね、『うーん、さすがにおれの息子だ』になったんだ。これで、いずれ一万五千タラント返してやれば、嬉しすぎて這い回るだろうよ」

「返す見込みはまったくないな。無理だと思っ」

「いいよ、気にしないでおくれ。父さんが四十八人の美少女に、『お手当』込みでいくら使ってるか知っ

たら、たとえ一億持っても返したくなくなるさ」「ところで父さんは？」

「もう、あの人ったら全然役に立たないんだから。騒ぎを聞いてからは、おまえに任せるよって言っただよかに消えちゃった」

「そうか、相談しようと思っただけだ」

「なにをさ」

「どこに逃げるかを」

「そんなの決まってるじゃないか。荒地だよ。街から一步出れば死ぬほど遠くまで荒地じゃないか。逃げ込んだら探し出せっこない。逃亡者には最適だよ。お前はボヘミアンになるんだ」

「わかった、今夜にでも荒地に紛れ込もう。ひとつ心配なんだけど、僕がいない間、神の子シヨールはどいうするの？」

「つまらない心配をするね。最初のころの客はシヨールを『本物だ』と思って見てただろうけど、最近じゃ単なる見世物。作り物なのは誰だって知ってるから代役で充分務まるさ。誰かにイエスはどこに行っただよかって聞かれたら『息子は神と話をするため、荒地で修行中です』とか言えば格好は付くよ」

「あと、心配なのは父さんと母さんに余計な迷惑がかららないことだけだ」

「嬉しいこと言ってくれるね。でも任しときな、ダテにシヨールビジネスやってるわけじゃない。スキヤンダルや警察沙汰は朝飯前だ。役所を買収するくらい金はあるしね」

「僕に心配かけまいとして言ってるんじゃないの？」  
「馬鹿だよこの子は。神の子だろうと誰の子だろうと、あたしがお腹を痛めて産んだことに違いはないんだ。いつもお前の味方だよ。お前が正しいと心から信じてる」言ってしまったって、『誰の子だろうと』は余計だったと気付いたが、イエスは何も感じなかったようであんまり安心した。

イブの推測では、追手はかなり多いはずだ。役人が動き、ベンダサンの用心棒連中が動く。細心の注意を払っても運が悪ければ捕まるだろう。そうなら、殺されずに生け捕りにされるようイエスにきつく言った。ベツレヘムの街に連れて来られさえすれば、助ける方法はいくらでもある。

大きな麻の袋にパンとワインと干し肉を入れ、イエスは暮れかかった街を走るように抜けて荒野に向

かった。家の窓からは、アダムがカーテン越しに泣きながら見送っていた。

星がきれいだった。無数の星座を南にたどった。あの下あたりがエジプトだろうか。本当に空中歩行ができるなら、すぐにでも歩いて行くのに。

イザヤ殺しは、自分でも驚くほど心の負担になっていない。時には自分が殺人犯だと忘れてしまう。でも、アンナは忘れられない。アンナの目、口、手、清らかな肌が浮かんで消える。今頃どこにいるのだろう。異国の服を着ているのだろうか。無人の荒野でイエスは泣いた。泣き疲れて眠った。

「おーい旅人、おーい旅人」

彼方から聞こえるかすかな声に目覚めた。追手かな？　すでに十分に熱せられた大地は陽炎を生み、遙か遠くの歪んだ景色の中に一人の男の姿があった。たった一人だ。追手ではないだろう。それでもイエスは慎重に、その場を動かないでいた。

「イエスだろ、俺だよ、ユダだよ」

イエスの隣に荷物を放り投げ、どきっと腰を下ろ

してユダは言った。「暑いね、まったく。こんな虫だらけの場所に一晩中いたのか？」

「虫は出なかったよ」

「どうもお前の答えはピンとが狂ってる。そこがいとこだけどな。まあいいや、ところで謝らなきゃならないことがある。きのう酒場で『男ならやってみな』みたいに煽ったろ。その結果がこのざまだ。悪かったよ。反省はしてないが」

「いや、僕こそ謝らなきゃならない。ユダのお父さんを殺してしまったんだから。怒ってるだろうね」

「誰が？　俺が怒ってるかって？」ユダは爆笑した。「お前、俺を全然知らないな。誰が怒るかよ。感謝してるんだ。イエス様々だ。俺にできなかったことを一瞬でやっつけてくれたんだからな」

「よくわからないけど」

「こういうたとえ話はどうだ。俺の目の上にはタンコブがあったんだ。目の上のタンコブだ。うっとうしくて邪魔で、なくなりゃいいと思ってた。でも自分で切り取ったら痛いだろうから手を出せなかった。それをお前がスパッと切ったわけだ。スッキリ最高、気分は爽快って、わかるか？」

「ますますわかんないけど、怒ってなければいいや」「いやじゃない、だめだよ。そういう人の心っていうか、人情の機微っていうか、お前はわかるようになるべきなんだ。ならなきゃいけないんだ」

「どうして？」

「お前が神の子だからだ。まあ気にするな。俺が教えるよ。俺だって、ちょっとばかり決心して出てきたんだから」ユダの口ぶりは急にまじめになっていた。

ユダも逃げてきたのだ。ユダが語ったのは次のようなことだった。

血を流して死んでいる父を見たとき、ユダは限りない解放感を味わった。これで、いつも何かに追われているような焦燥は消えるだろう。しかし同時に、不思議なことに、父を丁寧に葬ってやりたい気持ちも湧いてきた。死んでしまった父は、もう良いことも悪いこともできない。仏になったのだ。東洋の本を沢山読んでいたユダはそう感じた。仏は丁寧に扱われるべきだ。

ところが、ちょうど東洋から遊びに来ていた父の

ない。資産を守るためにイザヤの死は隠す通そう。なお、当面の間、山本八平が名実ともにイザヤの影武者となり、市場の開拓など、新規事業も継続する。

次に、これまで個人事業の色が濃かったベンダサン商会を、親族経営の法人に、徐々に切り替えることになった。実態はともあれ、経営者が一人ではなく同族の何人かになれば、借金を踏み倒しにくくなる。切り替えが終わったとき、イザヤの死を発表するものとする。

「えっ、それじゃあイザヤは死んでないことになってるの？」イエスが訊いた。

「まだ生きてるんだよ。うちの一家は、自由に死なせてもらえないらしい」

「殺しといてなんだけど、すごくかわいそうな気がする。どんなに貧乏な家でも、家族が死んだら、みんなで心を込めて野辺の送りをするだろう。金持ち不幸だね」

「カネがあるかないかじゃない。守るべきものを間違えてるんだ。だから全部イヤなのさ」

イザヤの死は、もちろん役所にも届けられていない。イエスの犯した殺人事件は無かったことになっ

弟だかイトコだかの山本八平というのが、父の服をまとい、父の眼鏡をかけ、父のデスクに黙って座った。死体さえまだ片付いていないのに、八平はイザヤに化けて仕事を続けた。この辺の人間には、東洋人は全部同じに見えて見分けが付かない。でも、肉親にはわかる。こいつ、何のつもりで父の椅子に座ってやるんだ。そのうち下僕たちが、まるで荷物を扱うように、父の死体をどこかに運び去った。

その間、店は開いたままで商売は続けられていた。番頭たちと業者との商談も中断されることはなかった。すべていつも通りだった。

夜になると親族会議が開かれた。どう知らせたのか、かなり遠くの親類も来ていた。家は厳重に閉ざされ、すべての使用人は部屋から締め出された。

哀悼の言葉も悲しみの祈りも無かった。まず最初に、イザヤベンダサンの死は当分の間秘密にされるのが合意された。こちらの用意のないまま公表すれば、カネを貸している国家や政治ボスが、こぞって踏み倒しにかかるに違いない。ベンダサン商会の子会社では幹部連中が謀反を起こし、独立を図るのは目に見えている。それらは最優先で防がねばなら

ていたのだ。いずれそのうち、ベンダサン一族がタイムリングを見て、イザヤが病死したなどと発表することになるのだろう。

「お前は追われてないよ。役人もうちの用心棒も、お前を追ってはいない。荒野に隠れていなくてもいいんだ。ベツレヘムの街に戻って知らん顔してても平気だよ。安心したか？」

「変な気分だ。安心とは程遠いな」

その後の会議で、連中はユダをベンダサン商会の役員にしようとした。仕事はしなくていいから、一族の看板を守るための役員で、イザヤの長男なら当然就任すべきポストだそうだ。取締役執行委員長という名誉職だった。一族全員、ユダが快く引き受けると思っていた。

「冗談だろ？ オヤジみたいな商売のやり方に関わりたくないから、ずっと酒場や娼婦の家にいたんだ。いくら頼まれてもイヤだね。はい、そうですか。なんて引き受けたら、俺自身がタンコブになっちゃまう。どなた様がお頼みくださっても、このユダは動かねえ。ご免蒙りやしょう」尻をはしょってその場に大

胡坐をかき啖呵を切ったという。

「それで逃げたの？」

「直接的にはな。おい、腹が減らないか？ なんか食おう」

二人は皮袋から食料を出して食べ始めた。イエスは儉約のためにチビチビ食べた。ユダはそれを見て、「なあ、もっと景気よく食えよ。食い物なんて、どこでも何とでもなるさ」と気楽に笑った。

その夜、イエスが眠ろうとしたとき、ユダが言った。「なあ、神様はいると思うか？」

「神様？ うん、僕は神の子だから、きっといると思う」

「じゃ、お前の親父とお袋は誰なんだ」

「父はヨセフで、母はマリヤ。それはたしかだ」

「そのどこに神様が入ってくるんだ？」

「えっ、考えたこともなかった。じゃ、僕は神の子ではないの？」

「いや、お前は立派な『神の子』だ。間違いない」

「ユダの言うこと、ちつともわからない」

「もしかするとイエスは神様の子ともじゃないかも

しれないが、だからどうだっていうんだ？ 神様と関係あるうがなかるうが『神の子』なんだよ。自分がそう思って、他人もそう思えばね」

「神様と関係なければ、ぼくは二セモノになるんじゃない？」

「自分を二セモノだと思うか？」

「いや、思わない」

「んじゃ本物だ。あのなあ、世の中には二セモノもホンモノもないんだ。そりゃあ、たとえば塩だって言つて砂を売れば二セモノさ。そうじゃなくて、おい、あの北極星が見えるか？」 ユダは北の空を指差した。

「ああ、見えるよ」

「きのうも晴れてたから見たはずだが、きのうの北極星と、今見えてる北極星は同じ星だって思う？」

「同じ星だろうな。星だから」

「何を根拠に？」

「ううんと、特に根拠はない」

「だろ？ 根拠なんかなくても、自分がそう思って、疑問も持たなければ、それは正しいんだ」

「それと神様がいるかと、どう関係があるの？」

「神様と同じ、ってことさ。今まで誰も神様と直接会ったことはない。会ったなんていうやつはキ印だ。

ところが、誰一人として神様がないなんて思わない。俺みたいな変人以外は」

「ユダは神様はいないと思ってるんだね」

「いや、いるかいんかかわかんないと思ってる。どっちでもいいことだしな。『いる』と思ってる人には神様はしっかりいるんだ。『いない』と思えばいないのさ」

「そうか。だけどどうして僕にそんな話をするの？」

「何の因果か、お前が神の子だからだ。自分がどういう立場で、どんなことができるのか、何をやってらいたいけないのか、きちんと理解してもらったためだ。それに、俺がやりたいことの相棒にもなってもらいたいし」

「僕に何かできるのかな。神様がいるかどうか不安になつてきたよ」

「そんなの気にすることない。神様が聞いてたら、いづれ何かしるしでも寄越すだろう」

そのとき、小さな流れ星が飛んだ。

「あれっ、見た？」

「おう、見たとも。神様が『おれはいるぞ』って言ったのかもしれない。ただの偶然かもしれないが」

街で言われていたほどユダは不良でも無頼な遊び人でもなかった。金持ちの子で、働かなくていい分、本を読んだり考えたりしていたようだ。

ユダは、神様こそいい面の皮だ、好きに利用されている、と言った。そう、問題は神様を利用した宗教なのだ。神様がいるとしたら人間を苦しませるために物事を進めるはずはない。人間が少しでも快適に、楽になるように世の中を導くはずだ。でも、実際のところ、そうなってるか？

まず断罪されるべきは宗教家たちだ。神の名を騙り、預言者だと偽り、民衆を恐怖で支配しようとする起になってる。言うことを聞かない女を塩の柱に変えるとか、そんなこと、本当の神が許すだろうか？ 宗教家にとって守るべきは民衆ではなく、自分たちの立場と利益だ。民衆の利益と自分たちの利益が相反したとき、彼らは迷わず後者を取る。

騙されるほうが悪いともいえるけれど、宗教家たちが何百年もかけて作り上げた騙しの構図は、無辜

な一般民衆をわけなく絡め取ってしまう。今の人間は生まれたときから騙される運命にある。自分で善悪を判断する機会さえ与えられずに。

そればかりではない。いったん反旗を翻せば『地獄に落ちるぞ』の脅迫が待っている。宗教家たちと異なる解釈をすれば『異端』の二文字がある。神はそんなに狭量なのだろうか？ 神様が天国で脅し文句を並べ立てているところが想像できるか？ 無理だろう。神は人間を脅かしたりしないのさ。

神は毒にも薬にもなる。使い方で錦の御旗にも、都合の良い言い訳にも、陰謀の正当化にさえなる。だから声高に叫ばれる『神の正義』っていうのが一番怪しい。神が正義を理由に戦いなどするか？

神がいるかないか、神が正しいか間違っているか、そんなことは問題ではない。いったん神の名を使う以上、人間の生活の安楽、心の安楽を目指さなければいけない。間違っても神の名をもって自己正当化したり戦争をしてはいけない。そんなこと、もしも神様にばれたら、神様は驚いて死んでしまうよ。

そういつたことをユダはイエスに語った。  
イエスには半分もわからなかったが、ユダの言う

## 荒野の奇跡

イエスとユダは荒野をあてもなく彷徨った。食べものは尽きかけていた。井戸も見つからなかった。しかたなくベツレヘムの方向に歩き始めたとき、遙か彼方に人影が見えた。

近付くと、元は白かったらしい粗末な服に獣の肩掛けを羽織り、羊飼いの杖を持った中年の男だった。「こんにちは。どちらへ？」ユダが訊いた。

「修行の旅です。行き先はありません」男が答えた。「もしお持ちなら、一切れのパンか一滴の水をいただけないだろうか」ユダが頼んだ。

男はイエスとユダを上から下まで眺め回してから、

「たいそうきれいな身なりの方々だ。神を信じているなら私に一タラント預けなさい。そうすればパンと水は手に入るだろう」

「もちろん神は信じています。一タラントお預けするのもやぶさかではありません。しかし、この少年をどなたと心得ておられるか」

ことはとても正しいような気がした。

「あとでもう一度話してくれる？ よくわからないところが沢山あるから」

「いいよ、何度でも話そう。だが、俺がこれからやりたいことを手伝ってくれば、自然にわかるようになる」

「何をするの？」

「本物の宗教を広めるんだ。神が自分たちと共にあると実感できて、みんなが幸せになれる宗教」

「僕は何をすればいいの？」

「お前じゃなきゃできないこと、つまり神の子でいること。少々芝居をしてもらうかもしれないが、ベツレヘムでやってた神の子ショーより楽だぞ。本音でやればいいんだから」

男はもう一度イエスを見た。

「いや、普通の少年にしか見えんが。高貴なお方かな？」

ユダはイエスに「自己紹介されてはいかがですか」と促した。そこでイエスは、

「父なる神と語り合うためにベツレヘムから荒野に出ました。イエスといえます」と静かに言った。

男は一瞬目を剥き、次第に笑顔になった。

「なんだ同業者か。二人連れとは珍しい。いつ始めたの？」

「始めた？ どういうことかね」とユダが訊くと、

「だって、俺もイエスだよ。神の子イエス。あんたらも食い詰めて行者になったんだろ？ 神の子イエスを名乗れば、あっちこっちで説教できるし、お布施も多いからな。まあいいよ、仲間に入れてやろう」

「えっ、するとあなたは偽者の神の子イエスなんですか？」イエスは驚いた。

「偽者とはご挨拶だな。あんただって同じだろ。神の前ではみな平等だ。まあ偽者どうし仲良くしようよ。ついて来るか？ 今、同業者が集まっている」

小さな泉の近く、ナツメヤシの木の下に、同じよ

うな風体の男たちが十人集まっていた。案内してくれた偽イエスは彼らを一人ひとり紹介した。といっても名前はみんなイエスなので、ユダとイエスは戸惑った。

「さて、こいつらも入れてやるうじやないか。反対はあるか？」全員賛成だった。

「それじゃ今シーズンのシヨバ割を始めよう。同じ村でイエスが二人カチ合ったらまずいからな。まず、兵隊のイエス。今度は少し実入りの良さそうなベツレヘムの北側でどうだ」

剣を持ったイエスが「いいよ」と言った。

「次は葉屋のイエス。悪いがシナイ半島の海沿いでどうだ。ガザの南のあたり」

「あの辺ねえ、まあいいや」腰に葉籠を下げたイエスがしぶしぶ言った。

この、成り行きで詐欺師になってしまった十一人をどう扱うか、ユダは空を見上げて思索した。太陽が眩しかった。そして、微かにだが太陽の一隅が暗くなりかけているのに気付いた。ユダは誰にも気付かれぬよう、そっとイエスに耳打ちした。「二十歩くらい外に走って太陽に両手を差し出せ。今すぐだ」戻った。

ユダは偽イエスたちの中央に立ち、「みなさん、顔を上げてください。罰せられることは何もありません。神の子イエスが願われたとおり、みなさんは祝福されました」と、おごそかに言い放った。その夜、十一人はイエスに忠誠を誓った。これからは天主として仰ぐという。

「そんなあ、僕はたまたま神の子として生まれただけだから、仰がれてもなあ」イエスは困った。「さればみなさん」ユダが引き取って「今後は全員で力を合わせて、神の子の言葉を世界の津々浦々まで広めようではありませんか。いわば布教活動です。活動中の衣食住は、不肖、この私ユダが保証いたします。本物の神の子に出会うなど、何と幸運なみなさんだ。活動を通して、みなさんお一人お一人が、

イエスはワケがわからないまま走り出て、少し離れた場所で言われた通りに太陽に両手を差し出すポーズをとった。

ユダは、わざと驚いた様子を見せ、「神の子イエス、何が始まるのでしょうか？」と叫んだ。

「おい、どうしたっていうんだ。驚かウサギでも啜えてるのか？」十一人の偽イエスたちは大笑いした。イエスは身じろぎせずに太陽を示し続けた。すると、不思議なことに太陽が欠け始め、少しずつあたりが薄暗くなつた。こうなれば舞台慣れしたイエスの実力発揮だ。

「ああ、天なる神よ、わが父よ、この者らをお許しください。私の名を騙り、未熟な魂のまま布教しておりましたことをお許しください。この者らは決して悪人ではなく、善人がゆえに、不純なる世間からはじき出された哀れな者たちです。神の御名においてお許しと祝福をお与えください」等々、二千人クルスの劇場でも通用する腹式呼吸で朗々と唱えた。

びつくりしたのは十一人の偽イエスたちだ。その場にひれ伏し、拜んでいる者、泣いている者、天に手を差し伸べるもの。ユダも調子を合わせて、しき

さらに信仰を深めることも保証いたしました。さらには、真の神の僕になりませんか」

一同はガヤガヤと相談し始めた。「食べるならいいじゃない」「山賊に遭つても怖くなくなる」「修行みたいのは勘弁だな」「女郎屋は行けるのか」などの声が聞こえてきた。そして、最後には「やってみるか」にまとまった。

「えーと、みんなを代表して、お言葉に甘えることにします」葉屋のイエスが言った。

それから各自が自己紹介した。名前はあるが、呼び慣れた以前の職業名をこれからも使いたいという。つまり、大工、軽業師、葉屋、井戸掘り、医者、吟遊詩人、兵隊、細工師、羊飼、錬金術師、船大工、ということだ。イエスとユダはそれを許した。昼間、荒野で最初に会ったのは医者の子イエスで、どうやらグループのまとめ役らしい。彼は、「せっかく何かの縁で一座を組むのだから、名前を付けなにか」と提案した。

ユダは考えた。イエスの複数形は何だろう。イエスズかな？どうも響きが悪い。イエズスでどうだ。

一座の名前はイエズス会に決まった。

## イエスの災難

訳注…このあと原典ではイエズス会の動きがこと細かに書いてあるんだ。錬金術師のイエスが船の触先を壊して船大工に怒られたとか、細工師のイエスが井戸にはまって大騒ぎとか。面白いけど本筋と関係なさそうなんでパス。それより、この頃になるとイエスの活動範囲が広がって固定カメラじゃフォローできなくなったから、神様はハイテク無人偵察機を使うようになったの。『神の目』っていう飛行機で、超高空から超超望遠レンズで撮影して超超超指向性マイクで音も拾う優れたもの。カナンのストーリーミング番組、今日のナザレは、ほとんど神の目からの中継になったんだよ。

イエスと仲間はずん三年間で二百以上の村々を回った。ヨルダン川に沿った村、ガラリアの村のすべてに立ち寄ったといっている。イエスたちは出来ることは何でもやった。立て付けの悪いドアの補修から、井戸掘り、簡単な灌漑設備作り、家畜の病気の予防、もちろん病人の治療、危険な橋の架け替え、薬草の

調合法、効果的な護身術、老人の話し相手など、村人が望む仕事を笑顔で引き受け、知りたいたいことを教えた。報酬は求めなかった。ただ、滞在中に寝泊りする場所だけを借りた。

最初のうちは、薄汚い男が十人以上ぞろぞろ来るのを気持ち悪がる人も多かったが、そのうちに「次はぜひうちの村に来てくれ」とお座敷がかかるようになった。

どの村でも、イエスたちは滞在の最後の夜にお楽しみショーを開いた。大きな篝火を左右に焚いたステージで、まず軽業師の曲芸があり、吟遊詩人がはやり歌を歌った後にイエス誕生の秘蹟を語った。最後にイエスが登場し、軽いトークから始めて感動的な大演説になる、といった筋書きだ。

イエスは愛と平和を説いた。人と人とのつながりを説いた。神はただ見ていてだけであり、決して人を罰しないと説いた。人間に罪などない、良心と真心で望むことはすべて許される。唯一、強欲だけは死を以ってしても購えない悪事であると説いた。殺すなどとは言わなかった。盗むなどとも言わなかった。ただし、自分より弱いものを殺すこと、自分より貧

しいものから奪うことは強欲であると説いた。

イエズス会のメンバーは、最初のうちは食うために参加していたのだが、イエスの説教を何度も聴くうちに例外なく大ファンになってしまった。

村人たちも大いに共感した。これまで、いろんな坊さんから聞いていたことは全然違って、イエスの話はすんなり納得できたからだ。イエスは、金銀で飾った宗教家にお辞儀をする必要はない。お布施を差し出す必要もない。なぜなら、彼らは十分に豊かだからだ。ローマの兵隊であれどこの官憲であれ、何を言われても税金など払う必要はない。彼らは村人を守る気などないからだ。アナキーだが非常にわかりやすい理屈だ。つまり、人間は自分がしたくないことはしなくていい、ということでもあった。村人は『これが聞きたかったんだ！』と感動した。

説教の最後はいつも決まっていた。イエスが聴衆に「神はいるか？」と問う。聴衆は自分の胸を指し「ここにいるよ」と答える。そんなコールアンドレスポンスで終わった。

イエスの教えはじわじわと浸透していった。それにつれて多くの村が年貢を納めなくなり、徴兵にも

応じなくなった。古い宗教を信じ続ける者は皆無で、坊さんたちは村に入ることもできなくなった。いわば宗教解放区とでも呼べる地域が出現したのだ。これらの集落では、イエスの教えを信じる秘密の記号として魚の看板が用いられた。魚の絵が表に出れば同志であり、宿なら安心して泊まれる。店なら決して騙されない正しい取引ができる。たった三年で、この文化は定着したかに見えた。

もちろん古い宗教で生業を立てている坊さんと、税金を吸い上げたいローマが快く思うはずはなかった。これ以上悪い病が広がらないうちに、イエス一派を掃討して危険な新興宗教を叩き潰す必要を感じていた。古い宗教と既成の権力、両者の利害はこのとき完全に一致し、話し合いが繰り返された。

古い宗教とローマが話し合う様子は神の目を通じてカナンの動物たちに細部まで見られていた。

「おい、なんとかしてあの若いのにヤバイって教えられないか」神様は心配だった。「どっか山奥にでも逃がそうよ。捕まったら虐められるよ」

「そうだけど、どうやって？」神様と囲碁仲間のサ

ルが言った。「大型の雲を迎えにやったら全員乗れるかもしれない」

「いや、あの若いのは逃げないと思うよ。逃げるくらいなら最初から布教なんかしないでさ。ローマに獲って食われれば偉人になるけど、逃げたらただの人だしね」わりと冷静にライオンが分析した。

「あたしもレオに賛成だな。弾圧されればされるほど新興宗教は強くなるんだ。これで教祖が殺されてもしたら、信者の結束は理屈じゃなくて感情になるでしょ。ものすごいパワーになると思う」二十年近く生きていのに全然老けないネコのマリアが言った。

「そうだよ。ユダが付いているから、そう簡単とか無意味とかには死なないかもね」オームが同意した。「じゃ、ただ見てるだけか？おれは心配でたまないけどなあ」神様は不満そうだった。

ある日、山道を歩いてきたイエスの一行に見知らぬ男が近付き、ユダに封書を渡した。開くとベンダサン商会からだ。近々ローマがイエス一党を捕まえるので、その前にユダだけ逃げろ、もしユダま

村で、イエスと仲間たちは井戸を浚い、病人を看病し、種籾の貯蔵庫を整備し、子どもたちに歌を教え、いつものように活動した。そして最後の晩に、おなじみの神の子シヨを聞いた。説教の内容は大體いつもと同じだったが、イエスは最後に付け加えた。私はローマ軍に捕らえられるだろう。しかしローマの兵隊を恨んではいけない。彼らだって好きでやってるわけではないんだ。あなたたちだって、立場がそうであれば私を捕らえるしかない。兵隊には優しく話し掛けなさい。人の道を説きなさい。この世に生来の悪人はいない。敵と思える人にこそ話しかけ、わかってもらえるのを待ちなさい。

シヨが終わるやいなや、ユダは馬を駆ってどこかに行った。残ったメンバーは村人に頼んで会議用の部屋を借り、パンとワインをそれぞれ大量に買い、どういいうわけかブタの腸やら石膏もどっさり購入した。

貧しい山村だけあって、まともな部屋はなかったが、冬場に弓の練習をするという、うなぎの寝床のような細長い部屋をやっと借りた。会議には向かない間取りだが仕方がない。メンバーは横長のテーブ

で捕まってベンダサン一族だとばれたら商売に差し支える、絶対にダメだ、と書いてあった。重ねがさね手前勝手な言い分だ。ユダは憤慨した。勘当でも何でもして縁を切れればいいだろう。このことをみんなに話すと、大工のイエスが言った。「勘当は意味ないよ。大勢の前でユダに『俺の名前はユダベンダサンだ』って叫ばれるのが怖いだけだ。それが嘘でも本当でも」

ユダはもろろん逃げる気などなかった。それより全員捕まりそうなのが問題だ。ガレリアは狭いから、官憲がその気になれば七日以内には捕まってしまうだろう。これまで三年間、言いたいことを言ってきたのだから、捕まったり殺されたりするのは覚悟の上だが、できることなら生き続けてもつと言いたい。せめてイエスだけでも。さて、どうするか。

次の村での公演予定はキャンセルしなかった。じつはたばたしても、どうせ居場所は知られているはずだし、一人でも多くの人たちの力になってイエスの話を広めたかったからだ。ただ、その次の予定はキャンセルした。多分、その頃には捕まっただけで公演はできないと予想したのだ。

ルに向かい、横一列に座った。現在残っている絵画は、このときの様子を描いたものだ。

イエスは切り出した。「追手が迫っている。明日あたり捕まるに違いない。捕まるのは僕一人ではないから、みんな逃げてくれ」

「冗談でしょう」船大工が怒った。「あんたこそ逃げなきゃ。俺たちは獄門さらし首でも構わないから、神の子だけは逃げ延びてくれ」

他の全員も同じ意見だったがイエスは承知しなかった。「それは違うよ。このイエズス会は一見平等にみえるけど、やっぱり主役は神の子の僕だ。だから僕の責任だし、大体、今まで自分が言ってきたことを考えても、逃げるなんてできないよ。最後まで愛と平和を叫びながら死んでやる。引き際はかっこ良くなきゃね」

話はなかなかまとまらなかった。

「もう僕がいなくてもいいんだ。みんなは三年も僕の話聞いてるだろ。これからは各自が散らばって、もっと広い範囲に僕の話を広めてほしい。それで、できればだけど、僕が何をしたらか、何を言ったかを紙に書いて残してくれないか。多少の粉飾や思い違

いは構わない。筋だけ通ってればいいんだ」  
「また昔みたいな偽イエスに戻るのには御免だぞ」細工師が言った。

「いや、これからは偽イエスじゃなくて、イエスの言葉を伝える使徒だ。十二人いるから十二使徒。なんか箔が付くじゃない」

何となくイエスに押し切られる形で、捕まるのはイエス一人、あとは逃げる、と決まったのは真夜中頃だった。そのとき、馬のいななきが聞こえ、ユダが帰って来た。そして細長い部屋に入るなりイエスに耳打ちした。イエスはうなづき、微笑んで言った。  
「みなさん、ユダが裏切りました」

大工のイエスが大きな金槌でユダに殴りかかった。医者やメスを持ち出し、井戸掘りはロープで輪を作った。

「待って、待ってよ。誰かが裏切らないと話が続かないんだ」イエスが必死でみんなを制し、ユダに話すよう促した。

「まあ聞いてくれ。結構良い筋書きだと思うんだ」  
ユダが馬を飛ばして行った先はローマ軍の基地だった。門番に「ベンダサン商会の者だ」と名乗り、

司令官に面会した。司令官は貧相な中年男だ。  
「なあ、手柄を立てたくないか？」ユダが切り出した。  
「何かベンダサン商会のお仕事で？」司令官は卑屈に笑った。

「まあ、商会に関係あるといえばあるし、成功した暁にはベンダサンの私兵隊長にしてやるよ」

「それはまた結構なお話で」  
「率直に言おう。イエスを捕らえるのだ。どうせ近々捕まるんだから、あんたのような立派な軍人に捕まえてもらいたい」

「そういうあなたは」  
「ユダだよ。イエスと一緒に布教してる。本名はユダベンダサン」

司令官は腰を抜かさっぱり驚いた。

「どうしてそんな、仲間を裏切るような」

「いいんだ。余計な心配はするな。やるのか、やらないのか、どっち？」

「ええと、軍本部に許可を申請して」

「おい、手柄を逃がすつもりか？そんなこと連絡したら、他の司令官に手柄を横取りされるぞ。そうしたら一生阿呆呼ばわりされる。それでもいいか？」

「わかった。やるよ。クビになっても私兵隊長の再就職口があれば」

「そうだよ。で、イエスのいる場所を教えるから明日の朝、ゆつくり捕まえに来てくれ。それで、夕方以降に死刑にすること。場所は髑髏ヶ丘のてっぺんだ。方法は十字架に張り付け。十字架をイエスに担がせて髑髏ヶ丘に登る。いいな？」

「なんか、やたら具体的だけど、いいよそれで」

「ただし、これから言うことが一番肝心だからね。もし少しでも間違えたら、ベンダサン商会はあんたの敵になる。イエスの弟子も殺しに来るよ」

「絶対に間違えませぬ。約束します」

「よし。この作戦は、あんた自身と腹心の数人だけでやること。それ以外は絶対に秘密だ。ここに百タラントある。前金で渡そう。成功したら二百タラントやろう。経費は別に請求していいよ」

「はいはい、何でもします」

「なんだ、そういうことか」大工のイエスをはじめ全員が大笑いし、成功を信じてワインで乾杯した。

医者やイエスが指揮して全員でイエスの等身大の

人形を作った。皮膚と肉はパンで、血管はブタの腸血にはワインを使い、なかなか上手にできた。顔は、嫌がるイエスをむりやり押さえつけて石膏型を取り、パンを押し込んでリアルなデスマスクを作り、細工師がきれいに色を付けた。型取りのときイエスが苦しだったので本当に死に顔に見えた。最後にイエスのボロ服を着せ、問近で見れば人形とわからないイエス二号ができた。

カナンではネコのマリアが狂喜乱舞の大喜びだ。「助かった、助かった、イエスが助かった、わーい」  
「かあちゃん、まだ早いよ。何があるかわかんないのが世の中だ」クロは心配性なのだ。

「いやあ、ユダっていうのはただ賢いのか悪賢いのかわからんやつだな」神様にもこの作戦は予想外だったようだ。

「それでも、リスクヘッジの面からは最高ですよ。今一番失敗を恐れているのは司令官でしょう。欲とビビリで」ゴリラの洞察力は鋭い。

「うまく行くようなら、神様、サルに言って雲を出して応援しませんか？」ウサギのオヤジが提案した。

## 髑髏ヶ丘の復活

翌朝、日が昇ってしばらくしてからローマ兵がやって来てイエスの逮捕状を読み上げた。治安暴乱、宗教法違反、国家転覆計画罪、違法魔法使用、公務執行妨害、凶器準備集合罪等々、罪状はいくつもあり、すでに死刑が宣告されていると付け加えた。

イエスは聞き終わると、微笑みながら「それだけですか？」と穏やかに訊ねた。兵隊が「これだけ」と答えると、「愛を広めた罪も付け加えてください」と静かに言った。そして、手錠をかける兵士を制して、「神よ、この人たちをお許しください。誰も好きこのんで兵隊になったわけじゃありません。農家の次男坊三男坊は、こうでもしないと食えないのです。兵士たちに祝福あれ」と高らかに唱えた。

用意された唐丸籠にイエスは自ら乗り込み「重ければ言ってください。自分で歩きますから」と兵隊に告げた。このときまでに、すべての兵士はイエスに圧倒され、護送人というより従者のような気分になっていったという。

さして大きくない髑髏ヶ丘は人でいっぱいになっていた。岩の上といわず道の真ん中といわず人だらけで身動きすらできない混雑ぶりだ。彼らの半分はイエスとの最後の別れにやって来たのだが、残りの半分はユダが『無料の大イベントで福引もあります』と言って集めた群衆だった。

籠を降りたイエスに茨の冠が被せられた。見るからに痛そうだが、それは見せ掛けで、兵士たちが事前に棘の先にヤスリをかけて丸くしていた。そして冠を被せるとき、兵士の一人が額に絵の具で、いく筋かの赤い線を描いた。

次に兵士たちはイエスに十字架を担がせた。十メートル以上ある巨大なもので、イエスが重いのを覚悟して肩に載せると、それは綿のように軽く、子犬一匹くらいの重さしかなかった。兵士の一人が「バルスで作ったからね」と耳打ちした。

神の子シヨで鍛えた演技力で、イエスは茨の冠の痛さに呻き、十字架の重さに喘ぎながら丘を上がつて行った。時にはよるめき、ときには膝をついた。その度に観衆は悲鳴を上げた。

なにしろ人だらけだから、先導する兵士はイエス

奇妙なことに、捕まったのはイエス一人だけで、十二使徒はお構いなしだった。逃げる用意をしていた十二人は、それぞれ逮捕の際に逃げながら叫ぶ文句を考えていただけに、期待が外れがっかりした。それでも計画通り、荷車に載せた人形を藁で隠し、髑髏ヶ丘に向けて急いだ。

唐丸籠が通る道沿いには、どこで噂を聞いたのか大勢の人たちが手に花を持って並んでいた。花は唐丸籠に挿されたのもちろん兵士にも手渡された。最初のうちは「任務ですから」と硬い表情で断っていた兵士たちも、ついには断り切れずに体中に花を付け、どう見ても罪人の護送とは思えない、にこやかな行列になった。

「ちよつとシナリオ以上の展開になってるな」ユダが半ば呆れて言った。

「やつぱりイベントはこうでなくちゃ。これは歴史に残りますね」井戸掘りは嬉しそうだった。

夕方近く、唐丸籠は髑髏ヶ丘のふもとに着いた。十二使徒の荷車はもう着いていて、丘の頂上で燃やすという大量の藁束を運び上げ終えていた。

が通る分だけ道をあけなければならぬ。

「はい、少しいてくくださいね、神の子のお通りです」と声を掛けながら進んだ。それでもイエスはもみくちゃになり、人ごみに揉まれた。これはユダの計画にとつて、限りなく都合良かった。

やつと頂上に着いたとき、もう歩けないという思い入れで、イエスはぼつたりと倒れ込んだ。そして一瞬、人ごみに紛れて姿が完全に見えなくなった。兵士たちは少し手間取りながらイエスを助け起こし、抱き上げた。イエスは失神していた。兵士たちは失神したイエスを十字架に釘で打ち付け、真っ直ぐに立てた。釘が打たれた手足からは真っ赤な血が流れていた。

槍を持った兵隊が十字架の左右に立ち、同時にイエスの脇腹を突いた。脇腹からも血が流れ出た。イエスはもう身動きせず、絶命したように見えた。

この処刑は、イエスを殺すというより見せしめが目的だったので、十字架に架かった死体はそのまま放置され、衆人に晒された。翌日、朝の光が凄惨な死体を照らし出した。真っ赤に染まった白い肌を正

視できる人はいなかった。だが、動物たちはそう思わないようで、夜明けと同時にカラスの大群がイエスの体を食べに来た。雀や鳩も神の子の死体を食べた。暗くなるとネズミも大勢で来たらしい。

「畜生の浅ましき。偉人だとわからないんだ」多くの人がそう思った。三日目になるとイエスの体はほとんど食い尽くされ、跡形もなくなっていた。

聞いてたのと違うよ。イエスは穴の底で少し腹を立てていた。ユダは、穴の深さは二メートルくらいだと言っていたけど五メートル近くあるじゃない？パン人形を隠すだけなのに、ちよつと深すぎない？予定通りばったり倒れて穴に落ちたのはいいけど、へたに落ちれば頭を打って本当に死んだ。危ないよ、この穴。腰から落ちただけも運が良かったな。それにしても、まだ腰がひどく痛い。立ち上がるのもつらい。骨にひびでも入ったんじゃないだろうか。いつもなら医者に診てもらおうところだ。穴の底に用意されていた軍用食料を食べながら、イエスは三日経つのを待った。

イエスの体は急上昇し、地上十メートルあたりでいったん止まった。天上から純白のスポットライトがイエスを照らし出した。

待っていた十二使徒はユダも含めて仰天し、思わず土下座して額を土に擦り付けた。たまたま十字架に花を供えに来ていた若い女たちは悲鳴を上げて逃げようとした。

「恐れてはいけない。恐れてはいけない。私は神の子イエスです。こうべを上げてください。私を見てください」

十二使徒と若い女たちはイエスを見つめた。

「今、世界に告げます。私は復活しました。夜のように漆黒の死から、明るい光の中に蘇りました。もはや誰も私を殺すことはできない。私は不滅です。私はいつもみなさんのそばにいます。いつも見守ります。地上に愛と祝福を。愛と祝福を」

再びイエスは上昇し、星のように輝く点になったかと思うと、次の瞬間には消えていた。

「どういう仕掛けだったの？」軽業師が震えながらユダに訊いた。

三日目の夜、穴の外が騒がしくなった。

「おーい神の子、おーい神の子」ユダの声だ。「たった三日で肉体が滅び去るとは情けない。まだ成仏はしてないだろう。ちよつと出て来て別れを惜しまないか」

他の十一人が唱和した。「別れを惜しもう、別れを惜しもう」

ユダにしては名文句とはいえない。三日もあつたのだから、もう少しマシな文言を考えてくればいいのか。

穴に蓋をしていた板が取り除けられ、縄梯子が降りてきた。これを伝つて地上に出て『復活』を宣言する予定だ。が、縄梯子が短かすぎる。イエスが飛び上がったのも最下段にさえ手が届かない。そうか、二メートルのつもりで作つたな。穴の外では「別れを惜しもう」の唱和が続いている。なんとかして出なければ恰好がつかないじゃない。イエスは焦つた。そのとき、縄梯子とは別にブランコの板のようなものが下りてきた。二本の細い糸で吊るされ、足を載せる台がある。台は穴の底に着地した。イエスは迷わずブランコに乗った。

「俺じゃないよ、俺じゃない。知ってるだろ、仕掛けたのは縄梯子だけだ。梯子を伝つて這い出してくるだけでもインパクトあつたのに、こんなものすごい仕掛け、人間ワザじゃない。神にしかできない大ネタだ。もしかして、イエスは本当に神の子だったのかも知らないな」ユダは取り乱し、つい口走ってしまった。

イエズス会の十一人がユダを取り囲んだ。「おい、今何て言った？イエスは最初から神の子だろ？それとも違ったのか？」

「いや、それはそのう、見解の相違つてやつだよ」

サルが運転する極彩色の雲にイエスは乗り移つた。

「はーい、お疲れ様でした。クランクアップです。イエスさんってネットで見てたより若いね。これくらいいい所に連れてくから、ゆっくり座つて」サルが雲を始動させながら言った。

「いい所つて、天国？」

「あんたにとつてはそうだろうな」暗闇を突き抜けて雲は飛んだ。

## ひまわり

明け方、雲は見知らぬ土地に到着した。元は砂漠だったようだが、今は緑化され、見渡す限りのひまわり畑になっている。雲は小さな泉の前に降りた。「さて、イエスさんよ、まず身だしなみを整えたらどうだ。なんか臭いよ」

たしかに匂う。三日も穴倉にいたんだから。イエスは泉で体を服を洗い、地面に広げて干した。サルが蒸かし芋とゆで卵をくれたので食べた。

「ここが天国なの？」と訊くと、サルは気軽に答えた「天国はもっと遠い。ここはエジプト」。

エジプト！今、僕はエジプトにいるんだ。この大地のどこかにアンナがいる。三年前のアンナの姿が目の前に蘇えり、イエスの胸は締め付けられた。「さあ、おいらはここで待つてるから、好きな方向に歩いて行きな。五分くらいで着くはずだ」

イエスはひまわりの林に入り、サルに言われた通り、心が命ずるまま歩いた。そよ風が吹いている。蜂の飛ぶ音だけが聞こえる。

昔、誰かに聞いたことがあった。ひまわりは人の死体の上に咲くと。こんなに多くの人がここでひっそりと死んでいる。なんと美しい墓碑だろう。僕が死んでも墓は要らない。自然の中に埋め、場所も忘れてほしい。

エジプトは広い。サルは五分で着くと言ったが、どこに着くのだろう。どこにせよアンナに会えたら奇跡だ。三年間、いろいろな経験をした。普通の人の一生分は働いた。もうこの世でなすべき仕事はない。したいこともない。アンナに会うことだけが、今の僕にとって唯一の生きる希望だ。でもエジプトは広すぎる。

イエスはひまわりの根元に崩れ落ちるように座った。ここで一生を終えるのもいいかもしれない。帰らなくてもサルは探さないだろう。この、ひまわりの美しい墓碑に囲まれて死ねるなら本望だ。でも、その前に、たった一目だけでもアンナに会いたい。夢でもいいから。

イエスの周囲でかすかに風が動いた。ふと目を上げると、そこにはアンナが立っていた。イエスは、すぐには信じられなかった。夢かと思った。ゆっくり

り立ち上がり「アンナ、かい？」と呟いた。

「イエスなのね」アンナは震えていた。

「ごめん、とても遅くなってしまった。約束も守れなかった」

「あの日から私は泣き続けました。涙で魂が流れ出るほどに。でも、もういいのよ。今、こうしてあなたの瞳を見つめているのだから」

「アンナ、もう離さない」

イエスはアンナの手をとって引き寄せ、アンナはイエスに身を任せた。二人は固く抱き合い、三年の歳月など消え去ったかのように思えた。

「おお、なんと素晴らしい。よかったなあ」カナンで中継を見ていた神様は目に涙を浮かべていた。「うんうん、これでいいんだ。イエス、よかったねえ」ネコのマリヤもうるうるしている。

「とつちゃん、この二人を一緒にしてやってよ」キシシロが神様に頼んだ。

カナンの森では、大きな象から小さな蟻まで、全動物がタブレットにかじりつき、ハッピーエンドの成り行きを見守っていた。

二人が固く抱き合い、イエスがアンナにキスしかけたとき、突然アンナは顔をそらし、涙を断ち切るかのように横を向いた。アンナが向いた方向から、小さな子どもの泣き声が聞こえる。「かあちゃん、どこにいるの？」

イエスの腕をそっと振りほどいて、アンナは声の方へ歩き出した。イエスも後を追った。

一歳半くらいの男の子が、ひまわりの中で迷っていた。アンナは駆け寄り「大丈夫よ。ほら、もう泣かないで」と子どもの手をとってあやした。

子供はうなずき、「僕、迷子になっちゃった」と泣きながら笑った。

イエスは子どもの前にしゃがんで微笑んだ。そして、頭を撫でながら尋ねた。「いい子だね。お名前は何？」

「僕、イエスっていうんだ」子どもが答えた。

頭を撫でるイエスの手が止まり、「私の名前を」と、搾り出すように呟いた。

「言うことを何でも素直に聞くようにイエスと名付けたの」アンナは涙をこらえて、やっと言った。

「何なのよー、これ」マリアは半狂乱だ。「こんな筋書き、誰が書いたの。神様でしょ」

「俺じゃないよ、違うよ。こんな結末、思い付けるほど俺は冷酷じゃない。ああ、どうにかして救えないかな」

「神様なら何とかしろよ」トラが涙目で吼えた。

「できることなら何とかしたい。みんなと同じだよ。だけど個々の事例には立ち入れないんだ、いわゆる運命ってやつだから」

「そこをどうにかするのが神様だろ」カケスが泣きながら鳴いた。

「そう俺ばっかり責めるなよ。おい、イエス、構わないから子どもごとさらって連れて来い。面倒は見ろぞ」神様はタブレットに叫んだ。

イエスは、歳のわりには人生の酸いも甘いも知っている。だがそれは他人の行動を第三者的に見るときに役立つだけで、いざ自分の身に何か起こったとなると、最善の解決策を冷静に判断するなどできっこない。半分は感情のまま、半分は祈る気持ちでア

ンナに言った。

「なあ、その子も連れて僕と一緒に来ないか。人生、まだやり直しはきく。どこか静かな土地で、三人で暮らそう」

アンナはしばらく黙っていた。そして、イエスの目を見ずに静かに言った。

「この子にはもう父親がいるのよ」

「わー、終わりだあ。ひどすぎるでしょ。こんなことで許せないよー」マリアがタブレットを壊そうとしたので、ハナポチが力づくで取り上げた。

カナンは動物たちの泣き声で満ちた。

一時間後、ひまわりの中を一人で歩くイエスの姿があった。イエスには、人類のためならいつでも犠牲になって死ぬ覚悟があった。しかし、自分の愛のために、自分の心を犠牲にするほどの強さはなかった。イエスの足取りは重かった。

サルは何も言わずにイエスを雲に乗せ、エジプトは離れた。

もう一度、ここに戻って来るだろうか。イエスは

考えた。できれば今すぐにでも戻りたい。でも、それは二人の傷口を広げることにしかならないだろう。愛していても憎んでいても時は流れる。いかに神が万能であれ、過ぎた日々を取り返せはしない。思い出は心の中にあるからこそ思い出なのだ。

「イエスさん、行き先のご希望は？」サルが訊いた。

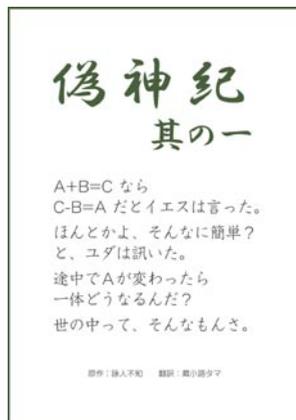
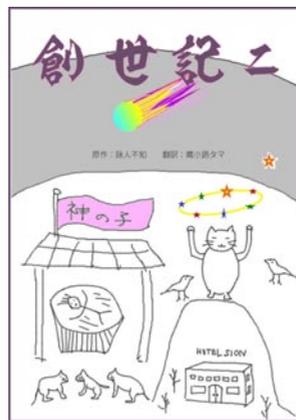
イエスはゆっくり首を横に振った。

「へい、わかりやした。安全な土地にお連れいたしやしよう」

雲はスピードを増し、その日のうちにカナンに着いた。



イエスしっかりしろ！ みんなでタブレットを見つめる



著ネコ近影

どちらもホテル・シオンにて  
接待係のハナボチと



偽神紀 其の二

発表日

ヒジュラ暦 1435 年 Jak の月 7 日

フツアの西暦では 2014 年 4 月 8 日

著ネコ：蔵小路タマ (イラストも)

仕方なく著作権管理させてる人：大塚 明

いないだろうけど、転載するときは管理人に言ってね。黙ってやったらヒッカク！

ね、ね？ わかった？ 実はこういうことだったのよ。どうも宗教っていうのは、信者獲得のためだろうけど、御伽噺っぽい出来事を「事実です」みたいに書いてるよね。三目目に復活したとか、右脇腹から子どもが生まれた、とか。アホはそれに釣られて「ありがたい」と思うんだろうけど、一方で一般的知識レベルの人たちからは「ばかじゃん」って見捨てられる。その辺の損得勘定、一回やったほうがいいと思うよ。どんな宗教だってマジなことも沢山教えてるんだから。

でも、このテキストが歴史的に正しいとは、アタシは言ってない。なにしろ魔法瓶の中のトイレトペーパーに書いてあった市界文書だからね。信じられるほうが間違ってるかもしれない。復活の一件だけは納得しちゃっけ。

翻訳では端折ったけど、ローマ軍の司令官と部下たちは、すぐにベツレヘムのベンタサン商会に行って傭兵になった。で、紅茶とコムを作る遠いアジアの農園に派兵されたんだってさ。事実を知ってたから口封じだね。十二使徒は言い付けを守って、各自で布教して回って、思い出を紙に書いた。文才ある人、一人もいなかったみたい。〇〇伝って、どれもみんなよくわかんないしつまらないでしょ。なに？ 読んだことない？ ん〜。

ごじゃ、またね。

タマ